（社）日本ライフストーリー研究所　　2023/04/15　第 32 号

JLSR ニュースレター

昔の想い出、小中学時代

児玉　泰斗

人間は年をとると子供にかえるという。この頃小さい時のことをよく想いだすので、自分もその年代に近づいたのかなと思う。

小さい頃の遊びといえば家から外に出ることだった。桶がこわれて残ったわっかを転がしながら家の近くを走りまわる。こままわしをする、こまを買うお金がないから、山へ行ってこまの材料になる木をとってくる。こま 5 個分の木を持ってこまを削るところへ持っていくと、こま 1 個をただで作ってくれた。敗戦後しばらくして草野球がはやり、それを楽しんだ。近くのお寺の庭で三角ベースにして遊ぶ。ボールやバットは手にはいらない。石を芯にして、そのまわりをぼろぎれで巻き、表面を縫ってボールにする。バットは山の木を切ってつくる。グローブは勿論なく、素手。初めて野球をやったとき、1 回目のバッターボックスでは下がれという。2 回目は 1 塁に行けという。なんでこう違うのだろうと思ったが、1 回目は三振、2 回目は四球だったのがあとでわかった。楽しくて薄暗くなるまで遊んでよく母に叱られた。中学生になり受験雑誌『中学時代』の懸賞でグローブが当たったときは嬉しかった。初めて手にする革のグローブ。今も家にある。

小学校入学は昭和 18 年 4 月広島市宇品国民学校、7 月に大分県の臼杵国民学校へ転校、翌年 1 月に広島市袋町国民学校へ転校、2 年生になった 5 月に長崎県の諫早国民学校に転校、ここで敗戦を迎え小学校卒業まで過ごした。父の仕事の関係とはいえ、はじめの 3 校には在校が短かったので、まったく想い出がない。ひとつ覚えているのは臼杵国民学校のとき、学校へ行きたくなくて、行ってきますと家を出たが公園で過ごして帰ったのが 1 日ある。母が知ってか知らずか、何もいわれなかった。だから想い出があるのは諫早小学校時代のものです。当時、諫早小学校と北諫早小学校の二つの校区があった。6 年生になった秋に諫早市内の転居で北諫早小学校の校区に移った。もう少しだから卒業まで諫早小学校へ通うことにしたが、学区がちがう。あいつはよそ者だと同じ小学生等にいじめられ会わないよう逃げ回ってた。つかまって道路沿いの畠につき落とされたときもあった。この数ヶ月の通学はつらかった。中学生になり同じ校区の学校にはいったら「コダマ君遊ぼう」と、それまでのいじめっ子が声をかけてくれる。当時、校区が違うだけで、どうしてそんなにいがみあっていたのか、今もってわからない。

中学校は北諫早中学校、佐世保福石中学校、その後いったん広島市の宇品中学校に転校、再び長崎県へ戻って大村郡中学校に通った。ここでも 3 年生 5 月から過ごした郡中学校しか想い出がない。郡中は全国でもめずらしい農業指定校だった。そのためか職業家庭の時間は雨でないかぎり農作業だった。田植え、稲刈りは勿論、さつまいもの苗植え、肥やしやり（当時は下肥）、草むしりなどいろいろやった。夏休みには農業と登校日があり、18 クラスが順番で登校した。あるとき「おまえ、牛の世話」といわれてとまどった。こわくて手綱もひけない。なんとか

先生に話して交替してもらった。作業をさぼっても畑に座らされるぐらいでひどく叱られることはなかったが、作業が終わって鍬など道具をきれいにしないとすごく叱られた。道具の大切さを教えられた。期末になって、みんな並んでここを耕せと先生。それを見ながら先生は点数をつけている。素人の自分に良い評価が得られなかったのは当然だろう。夏休み前の１週間、午後は全員が海に通った。よく泳げる人、少し泳げる人、泳げない人の3クラスに分けて海に入る。校長先生は先に来てて海のなかから「気持ちよかぞ、早うはいらしてもらえ」と笑っている。自分は少し泳げるクラスにはいったが、泳げない人もここで指導してもらえてありがたかったと思う。夏休みのある日、漁師の子供と一緒に泳ぐことになったが、いきなり舟で沖へ出てここで泳ごうという。深いところにきたのは初めてで、はじめは舟からなかなか離れられない。それが2m、5m、10mと離れられるようになり、水での浮き方を覚えた。これが以後、泳ぎの自信になった。夏休みあけには黒んぼ大会があった。どれだけ日焼けしたか競うもので今では考えられない。思い出すと懐かしく、楽しい日々だったと思う。

今はスマホ、デジタルとなにかと便利な時代、これに自分はついていけない、ついていく気持ちがないといったほうが正しいかもしれない。不便でいい、無駄があってもいい。自然の恩恵を受けながら野山を歩き、畑での土いじりを楽しみながら残りの人生を過ごしたいと思う。樹齢 500 年を越える大木に出合うと問いかける。「これから社会はどうなるのだろうか。よりよい方向に進むよう見守って下さい」と。

（こだま・たいと　会員）

会員エッセイ

ライフストーリーについて　人生の物語の編集から解放へ

山本佳世乃

ここしばらくライフストーリー研究について悩んでいたことがある。もともと私はライフストーリーを語り、語りなおすことによって、自分の人生の意味づけを変えられる可能性がある、という点に興味をもってライフストーリー研究を行ってきた。自分の人生の意味を再編集することで、より明日を生きやすい形に自分の人生を仕立て直す手伝いをするというところに、遺伝カウンセラーとしての私がライフストーリーインタビューをすることの意味を見出してきた。

けれど、自分自身が生活の中で得た学びとして、どうにも今自分が存在している、「いま・ここ」から意識を離す時間が長いほど、過去や未来に思いを馳せるほどに虚しさやら心配やらに支配される時間が長くなるという気づきを得た。過去なんて、振り返らなくてもいいのではないかしら？未来なんて、求めなくてもいいのではないかしら？それより目の前の昼ご飯を心して食べたり、目の前の人をしっかりと認識して話しをしたり、具合が悪い時にはそんな自分の体に意識を向けながらできることをやってみたり、そんな繰り返しによって形成されていく人生の方が良いような気がしてきた。

そこではたと、ライフストーリーを語ることの意味がわからなくなった。自分の人生一式を語り直し、持ち歩くことが重荷に思えてきて、インタビューに出ようにも迷いがあって動けなくなっていた。

そんな中で、もう一つの気づきが訪れた。思いを語ることや書くことは、思いを外に向かって解放する役割をもつのだ。思いを外在化すると、それだけで何かすっきりと手放せたような気分を味わったことがあるかと思う。だから、自分のライフストーリーを再編集して後生大事に持ち歩くためにライフストーリーを語る場を作るのではなく、ライフストーリーをその時・その場で解き放つことで、あらたなスペースを自分の中に作り出す、という意識でいるのはどうだろう。実際には、語られたライフストーリーの扱いは、インタビュイーが決めることなのだけれど、この思いでならば再びインタビューに出かけられそうな気がしている。

森岡清美資料のアーカイヴ化に寄せて

山本哲司

浄土真宗の施設／習俗を巡って地域の暮らしを聞き取っている。

真宗が象る「宗教社会」の構造を詳細に分析したのは、森岡清美先生の大著『真宗教団と「家」制度』である。寺院同士や門徒の関係、教団組織を同族理論から解き、家制度の理解を深めた。大正期からの真宗の衰退を考察する森岡先生は、問題意識のあり方について色川大吉先生の以下の言葉を引いている。

「フォークロアの世界が即自的にあるとフォークロア（の学問）は出てこない。一定の解体が発生しなければ矛盾意識なり、それに対するシャープな好奇心も生まれない」

一方、日本近代化の基層として家制度を考察するのは『商家同族団の研究』をはじめとする中野卓先生の同族研究群である。中野先生は同族を「「日本近代的」なもの」と見ている。

…同族や親方子方を単に封建社会の遺制とか残存と見るのではなく…やがて「日本近代」を迎えるその足場となり、跳躍版となったものとみる。…歴史とともに変動しえないものは文化の伝統と呼ぶに価せず、「残存」にすぎない。その文化の、その時々の社会的現実のなかで機能しえない、生きていない「伝統」は、その社会その文化の伝統とは呼びえない…

御二方の論述は、実証性を貫きつつ理論化を目指す強靭さを持つ。日本社会学の創成・有賀喜左衛門が開発した同族概念から、日本社会の基層に迫る。研究所代表の桜井さんは、有賀理論の独特の生活への視角を指摘している。御二方が後にライフ・ヒストリーに取り組むように、先生方の著作にも生活者の現実感や主体性を重視する志向性がある。

また御二人ともに家制度分析では先祖観を重視する。問芝志保によると色川先生も民衆史の立場から祖先崇拝に注視しているという。明治来の近代化は、皇祖を頂点とする家族国家観を政体確立に利用した。しかし民衆の祖霊信仰を天孫神話・皇霊信仰に取り込む異質なものの融合である家族国家観は、民衆の意識をとらえても恒常的な精神とはならない。色川先生にとって民衆の宗教性は、「幻想の被害者」として批判的精神の基盤とみなされる。

中野先生は家集団の自律性から先祖観に着目している。先祖から継承する「家の永続」性への寄与に家長の権威の源泉がある。「「先祖代々」が、現在の家長たる彼に命ずるところに従うことにおいて、彼は現在の彼の成員たちを支配した」。

森岡先生は「時代とともに変動」する家制度が継続・繁栄する起点として、真宗の先祖祭祀の位置づけを考察する。父母の供養すら回避する姿勢が親鸞思想の凄味だが、後続による真宗の拡大・教団化に祖先崇拝は切り離せない現実があった。森岡先生は教義解釈は門外漢と自重しながらも、真宗教義と民衆の訴求の矛盾に深い理解を寄せる。宗祖の思想と教化の現実の矛盾や葛藤を、単純な”葬式仏教”批判ではなく、具体的な真宗浸透の力学と見る点に特徴がある。その一方で、近代化による家の解体とともに先祖祭祀が意味変容する過程を、死生観の変容として考察する…

…さて、不肖ながら、アーカイブ化を機に、自身の聞き取りで学ぶ点から当研究所に関わる御三人の研究を振り返った。上記内容に関する資料とは限らないが、研究所では先生方の資料の保管がはじまっている。研究所の構想段階で夢想された「資料館」が期せずして形を成してきた。内心、戦後日本の民衆史・家族研究・宗教研究を代表するレジェンドがアーカイヴされる研究所に、‘ヤバい、人知れずなんだかすごい研究所になってきてるぞ’とドキドキしている。「人知れず」を好む質だけれども「人知れず」を取らなきゃいけないなぁと考えながら。

第 16 回ライフストーリー調査研究講習会の報告

2023 年 3 月 19 日（日）に第 16 回ライフストーリー調査研究講習会を開催しました。今回は、「ライフストーリーの分析／解釈」をテーマとし、参加者は 12 名でした。

以下に、参加者の感想（抜粋）を掲載します。

〇印象に残ったのはLHとLSとの違いの一つである、「聞き手の存在」についてです。語りの妥当な解釈の

ために反省的自己言及が必要という点で、聞き手との関係性の中で語られた(語られなかった)ことについてLHでは言及せず（無視して）分析・解釈を進めてしまう一方で、LSではそこに言及していくことの違いと、その重要性があらためてわかりました。そして、話し手も揺らぐ、聞き手も揺らぐ、関係も揺らぐという中で、分析、解釈、論述をしていくことの難しさもあらためてわかりました。

〇語りの様式について、さらに深めて学びたいと思いました。

〇今後の研修を録画してアーカイブ化すると良いと思います。今までの研修も ZOOM で録画していれば良かったと思うことがありました。

〇「分析には、データ自体に語らせることと専門的抽象的なカテゴリーを利用することの間のディレンマがある」には納得したが、これが結構難しいと感じている。

〇ライフストーリー研究について、改めてじっくり考え整理する時間を持てました。2 回のブレーク・アウトセッションも大変勉強になりました。特に 1 回目の語りの解釈の議論では、自分の構えというか偏見、先入観がもろに露わに出てしまい、考えさせられました。

〇前回出席してからかなり経っていましたので、忘れていることを再度整理する機会になりましたし、自身の経験を重ねる過程で生じた新たな疑問について学習することができました。

〇いちばんよかったのは、トランスクリプト(TS)の読み方を知ることができたことです。今まで自分の勘のようなところに頼っていたところがあったので、それをきちんと知ることができ、今後の論文執筆に活かそうと思っています。

〇印象的であったのは、「語りの非一貫性」の部分でした。先生の解釈、例で使用されていた研究者の「不条理」という解釈、その他、可能性のある解釈を考えていて、ライフストーリーの解釈の深さや繊細さ、面白さ、研究者の視点や世界観の違いなど、非常に興味深く感じておりました。

講習会　Q&A

以下では、講習会で頂いたご質問への回答を、紹介します。

Q１　語り手の感情表現をどう描くか

A. 語り手の価値判断や評価を踏まえた経験を描く、との私の話に対する質問です。質問の意味を取り違えているのかもしれませんが、言いたかったことは、何をしたか、何があったかではなく、語り手が自分の行為や出来事をどのように見ているのか、その評価や価値判断を含めて描いていくことが必要という意味です。私が言ったのはこちらがまとめた記述への語り手の感情ではありませんが、仮に質問が記述への反発の感情ということであれば、もちろんありえます。そこを注意深くするには、自分の記述内容の大筋をあらかじめ語り手に示して、反応をみたうえでまとめるということになろうかと思います。ただ、私は相手に失礼のない書き方は重要だけど、相手に気に入られる書き方、常に相手の承認を得る必要があるとは思いません。後から、そんなつもりで言ったのではないという指摘はあり得ますし、それがこちらの誤解であれば、次の回からその指摘を活かすようにすべきでしょうが、他の語り手の語りとの関連もありますから、自分がしっかりその事態を記述できているとすれば、何も臆することはないと思います。

Q２　資料３、「矛盾する語り」は、調査者にとってはそうかもしれないが、協力者にとっては「抵抗する語り」といえるのではないか

A.　おっしゃる通りのことがありえますが、この場合は、語り手が「谷内先生」もりっぱな方であることを認めているので、抵抗とまでは言えないと思います。調査者のスタンス（谷内先生の功績評価）を批判しているのではなく、違うコンテクストで自分の経験をしっかりと述べていると考えるべきでしょう。

Q３　「自己がフィールドワークの道具」と言ったのはだれか

A. 私が借りたのは、John van Mannen et. al., 1989 です。拙著『インタビューの社会学』の文献一覧を参照してください。ただし、ある本のイントロで使われた言葉ですので、私のような説明とは異なります。

LS 研
4 月例会のお知らせ

日時:2023 年 4 月 22 日(土) 14:00～17:00

場所:日本ライフストーリー研究所リアル参加(若干名)
およびオンライン参加

報告者:齋藤公子さん (立教大学大学院)

報告タイトル:がん患者の集団に何ができるか――肺がん患者たちのライフストーリーと「生きる権利の訴え」

概要:今回の発表は、発表者の博士論文(題目:肺がん患者たちが参加する集団活動についての社会学的研究)にもとづくものである。そこでは、2010 年代半ばになって活発になった肺がん患者たちの集団活動と、それに参加する人々のライフストーリーを検討し、その検討の課題としては「肺がん患者たちの集団活動に出合ったことで、私(＝発表者)が受けた衝撃とは何だったのか」を明らかにすることを挙げた。今回はなかでも、5 名の肺がん患者のライフストーリーを検討した章と、肺がん患者たちが集団の外に向けて行った「生きる権利の訴え」を検討した章の内容を報告する。その際には「がん患者の集団に何ができるか」をテーマに考察を進める。

申込:以下の URL よりお申し込みください。
http://lifestory.or.jp/meeting_form/

★報告者は随時、募集中です。メールにてお問い合わせください。語りの地平 Vol.8 に投稿希望の方は、ぜひとも、報告をお願いいたします。

『語りの地平』Vol.7 の合評会を開催しました

『語りの地平』7 号の論文の合評会が、以下の要領で開催されました。

日時:2 月 25 日(土) 13:30～18:00

場所:日本ライフストーリー研究所及び Zoom

13:30 松本明香「日本語教員の役割としての『再包摂』再考―他分野教員の『抵抗の語り』を受けて」

14:15 髙井かおり「日本語教師を経験した日本語教育者の語り―キャリア形成の視点から」

15:00 寅丸真澄「成人日本語学習者のライフキャリアにおける留学の意味―アイデンティティとトランジションの体験の語りから」

(休憩)

16:00 柴田豊「キャリア発達論的に見た牧師兼チャプレンのライフストーリー―『タテマエ』抜きに得られた語りとその背後にあるもの」

16:45 河野義貴「精神障害者の自死遺族のオートエスノグラフィー」

17:30 全体討論

《from 代表》

参加者は約 30 名、うち 3 名が来所した。執筆者の報告の後、活発な議論が行われた。今年度は日本語教育関連の論文が多かったので、比較的議論が日本語教育関連に集まったように思う。日本語教育のライフストーリー研究としては、調査者がライフストーリーを聞く協力者が同じ日本語教員である場合は一種の当事者研究になるわけだが、その際の研究の進め方はむずかしい。まず協力者の何に焦点化するかとなると、日本語教育の教育方法か、生き方そのものか、あるいは外国人への支援者かなど、日本語教師が「ちゃんとした職業」として確立されていないことから来る諸問題。また、調査者の「構え」にしても、研究者としてか、実際に教え・支援する実践者としてか、多様な反省的視座が要請される。

掲載論文は、多くが投稿前、投稿中にライフストーリー研究会で発表し、研究会での討議をへて洗練したものになった。今年度の『語りの地平』8 号の投稿エントリーの締切が 4 月末にせまっているが、エントリーをされた方は今回の報告者のように早めに研究会で発表して、論文の完成度を高めてもらいたい。

『語りの地平』Vol.8 原稿募集!!

〇投稿エントリーを受け付けています。論文タイトル（仮題でよい）、投稿ジャンル（論文、研究ノート、書評、特集、調査報告など）などを明記し、ホームページのエントリー窓口から申し込んでください（エントリー締め切りは 4 月末日です）。投稿 原稿（特集以外）の締め切りは 6 月末日です。

〇論文、研究ノートについては査読があります。

〇特集は「分析・解釈のおもしろさ、むずかしさ」です。ライフストーリーの分析、解釈に関するあれこれ、です。試みや疑問、発見などをご紹介ください。締め切りは 7 月末日です。

〇刊行は 11 月（予定）です。

編集委員会・投稿規定

（社）日本ライフストーリー研究所運営委員会決定
2015 年 12 月 5 日
日本ライフストーリー研究会編集委員会改正
2022 年 10 月 20 日

【投稿】

1．本誌は日本ライフストーリー研究会（Japan Life Story Association, 略称 JLSA）の機関誌であり、原則として年 1 回発行する。編集委員会の構成は日本ライフストーリー研究会／一般社団法人日本ライフストーリー研究所の会員から構成される。編集委員会事務局は一般社団法人日本ライフストーリー研究所におく。

2．本誌は、ライフストーリー、オーラルヒストリー、ライフヒストリーの研究に寄与する論文、研究ノート、研究動向、フィールドワークの報告、関連文献の書評、JLSR 所蔵資料の紹介などを掲載する。

3．投稿資格は原則として前年度会費を支払った会員に限られるが、編集委員会が適当と認めた場合はその限りではない。

4．論文と研究ノートにおいては、前号に掲載されたジャンルと同一ジャンルへの連続投稿はできない（研究ノート→論文、論文→研究ノートは可）。他のジャンルでの連続投稿の場合は編集委員会の許諾を得ること。

5．投稿原稿は、未発表のものでなければならない。他の雑誌との二重投稿は認めない。

6．投稿原稿のうち論文（原著論文）および研究ノートは、原則、査読審査のうえで編集委員会が採否を決定する。その間に、投稿原稿は審査委員会から原稿の加除修正を求められることがある。

7．編集委員会が会員に寄稿を依頼することがある。

8．投稿する会員は、あらかじめ投稿エントリーを行い、締め切り日までに編集委員会に原稿のワードファイルのデータを電子メールで送付する。

9．本誌掲載原稿の著作権は、原則として本研究所に帰属する。但し、掲載誌刊行 1 年を経たあと、著者が著作権の返還を申し出たとき、その申請を正当と認めた場合には返却する。なお、その場合でも、本研究所の運営に必要な事項（本研究所ウェブサイト等での掲載、掲載誌の販売等）については著者の許諾なしで継続実施できるものとする。

10. 掲載原稿の著者は、掲載された論文等を機関リポジトリや自分のウェブサイトで公開することができる。ただし、掲載誌刊行後 1 年間は公開できないものとする。

11. 論文、研究ノートの掲載者には掲載誌を 1 部贈呈する。

【審査（原著論文、研究ノート）】

1. 編集委員会は、各投稿原稿について会員の中から適切な 2 名以上の審査委員を選び、審査を依頼する。
2. 審査結果は、下記の評価区分で表記し、審査委員のコメントと併せて投稿者に通知する。
   A＝ほぼ修正なしで掲載可
   B＝コメントに沿って修正した上で掲載可（1, 2 週間以内に修正可能な水準）
   C＝コメントに沿って修正した上で再審査が必要
   D＝掲載に値する水準に達していない
   E＝テーマが『語りの地平――ライフストーリー研究』にそぐわない
3. 審査結果がB・C評価の場合、審査委員はできるだけ具体的に修正箇所を指示することが求められる。B評価の場合は編集委員会が再審査を行い、C評価の場合は同じ審査委員が再審査をする。D評価の場合にも、投稿者が希望すれば、期限内に修正の上再投稿して同じ審査委員による再査読を求めることができる。
4. 審査結果が2ランク以上の相違がある場合、編集委員会で検討する。新たな審査委員に審査を求めることがある。
5. 以上の審査過程を踏まえて、掲載の可否は最終的に編集委員会で決定する。

執筆要項

編集委員会改正:2022 年 10 月 20 日

1．原稿の長さ

原稿字数は以下を標準とする。（長くなる場合は、要相談）

・論文：20,000 字
・研究ノート：8,000～12,000 字
・フィールドワーク報告：3,200～12,000 字
・特集（エッセイ）：4,000～6, 000 字
・書評：2,000～3,200 字
・他のジャンル（例、資料など）は編集委員会にエントリー時に申し出ること。

2．要約とキーワード

論文には、500～800 字程度の要約をつけ、要約の末尾に、３～5 語のキーワードを明記する。なお、論文については、著者の希望によって末尾に英文要約＋キーワードをつけることができる。

3．書式

論文は、表題・執筆者氏名・和文要約・キーワード・本文・注・引用（参考）文献・図表・（ひらがな氏名　所属）の順で構成する。

4．表記法

(1) 固有名詞（匿名化された語り手など）のアルファベット表記は、全角文字。他の英字や数字は、原則として半角文字。本文中の「。」「、」「『』」、「（）」「〈〉」などの記号は全角文字。
(2) 節は全角文字（1　見出し）、項は半角数字（1.1　小見出し）、項以下は半角の(1)(2)・・・を用いる。
(3) 年号は、原則として西暦を用いる。元号表記には「2015（平成 27）年」と記す。

5．文献引用と注

(1) 引用文献は、本文中の引用、参照個所の最後に（桜井 2002：15）のように、「（著者姓 発行年：引用頁）」となる。
(2) 注は、本文該当箇所の語句のあとに（右肩ではなく）、1)、2)のように片括弧の半角で記し、本文の最後にまとめて記載する。
(3) 末尾の文献リストはアルファベット順で記載する。
(4) 和文文献の句読点は全角の「，」「．」を用いる。和文文献は、著者名、出版年、書名、出版社名の順に表記する。翻訳文献は、著者名をカタカナ名として、あとは和文文献に準じる。なお、原書を記したいときは翻訳文献を記載したあとに（　）内に欧文文献に準じて記載する。
(5) 欧文文献は、句読点をはじめ著者名などすべて半角で表記する。書名、雑誌名はイタリック体とする。

一般社団法人
日本ライフストーリー研究所
Japan Life Story Research Institute

2023 年度 総会のお知らせ

2023 年 6 月 4 日(日)
13:00～15:00

リアルとオンラインで参加可能の予定です。欠席の場合は委任状（メール連絡で可能）をお出しください。

研究相談について

八ヶ岳の研究所に来所することが困難という方のご要望に応えて、ZOOM での相談を受付けています。

相談時間は 3 時間程度、費用は 5,000 円になります。（詳細はお問い合わせください）

ご希望の方は、info@lifestory.or.jp までご連絡ください。

受け入れ論文、図書、報告書

2023 年 1 月 1 日～4 月 10 日（下線は会員）

論文、報告書、著書などをお送りください

- 渡辺雅子,2023「インド・デリーにおける立正佼成会の展開」『明治学院大学社会学・社会福祉学研究』161.
- 矢吹康夫,2023『履歴書の顔写真が採用選考の判断に及ぼす影響　企業人事を対象とした履歴書評価実験の結果概要の報告』立教大学社会学部.
- 鳥越皓之,2023『村の社会学――日本の伝統的な人づきあいに学ぶ』ちくま新書.
- 今井昭彦,2020『近代群馬と戦没者慰霊』御茶の水書房.
- 今井昭彦,2023『幕末維新と国事殉難戦没者』御茶の水書房.
- 本郷正武・佐藤哲彦（編）,2023『薬害とはなにか――新しい薬害の社会学』ミネルヴァ書房.
- 青森公立大学佐々木研究室（編）,2023『造形芸術としての「ねぶた」――富山県・北海道の行燈／京都瓜生ねぶたとの比較から』青森公立大学佐々木研究室.
- 西平重樹・高橋正樹,2022「世論調査の 70 年　一銭硬貨で乱数を作成する――ある乱数表の戦後史」／高橋正樹「奄美大島の本土復帰の世論調査――POST 資料、Iwao Ishino、水野担」『よろん　日本世論調査協会報』日本世論調査協会.

ご寄付をいただいた方

・鈴木　明子

運営にご協力いただき、ありがとうございます。

〇ひとり暮らしの高齢男性の自宅で相談を聞いた。「自宅にある5つの遺影のお世話を毎日欠かさずにしているが、遺影の皆さんは満足しているのか、わからない。話をしないし、風呂に入らない、食事もしない、自分は監禁しているのではないかと思って不安だ。3年前に亡くなった二男はこの家にいて、時々会話をしている」という内容であった。私たちはどう返答したものか…混乱してしまった。彼の暮らしぶりや健康状態などを聞くと、ピシッとシャッターが降りる。1 時間くらい経ったころ、しびれを切らしたもう一人の職員が本人に言い切った。「私は看護師だからわかります。この中の方々は健康です。顔色も良いし、とても満足しています。大丈夫です」と。ようやく私たちは解放された。しかし、生きていると思っている二男の戸籍と健康保険証を復活させたいと市役所と交渉している彼の課題は、まだ残ったままだ。精力的に動いている彼の情報はあちこちから寄せられる。そして、私たちと彼との対話はまだ続いている。(OA)

〇植物が多い私の家。例えば、30 年以上前に購入した「サンセベリア」(虎の尾)。当時、30 ㎝ほどの一鉢を購入したのだが、株分けをしていったらいまや、2mほどに成長したサンセベリアが 16 鉢になっているた。その中の 3 つの鉢はパンパンで、さらなる株分けが必要だ。また、20 年以上前に購入した 1 鉢のイチゴも、ランナー（蔓のようなもの）を伸ばし自ら増殖し、現在はプランター13 個になっている。ベランダでのいちご狩りが楽しみだ。（MO）

〇毎日のように ChatGPT の話題を耳にする。実際に会話をしてみると、その背後にある集合知の姿がうっすら浮かび上がってくる。今はまだ、インターネット上の情報を学習した段階に留まっているから、学習の基となる情報を生み出す人間の役割は、ぎりぎり失われていない。けれども、AI が自ら新たな知を創造する日もそう遠くなさそうだ。生きている間に、巨人の肩ならぬ巨人の口と、直接対話することになるのかもしれない。(TT)

〇4 月上旬、水俣へ出かけた。6, 7 年前に、色川大吉さんが 70 年代に手がけた「不知火海調査団」資料を水俣病資料館へ一括寄贈したあと、どのようにアーカイヴ化がされているかを調べるためである。以前は、学芸員も配置されていない資料館だったので、放置されているのではと心配していたのだが、あに図らんや、現物はしっかり文書箱に保管され、さらにすべてのデジタル化が完了していた。多くの録音の生テープも PC 上で再生できるようにデジタル化されていた。学芸員が配置され、デジタル化の要員も一時雇用されていたようだ。大いに安堵したが、さてどのように公開するのかとなると悩ましさがつきまとう。

ただ現市長は水俣病問題には消極的で、できるだけ目立たせない方向で動いているらしく、市立の資料館も日陰の存在となりつつあると聞く。外国人が見学に来ているが、外国語の案内は少なく不親切である。展示は、数年前に改装されてきれいにはなったが、加害責任者のチッソ関連の展示は、チッソ関係者の承認を得たと聞くから、水俣病問題の根幹は曖昧なままだ。水俣病の認定訴訟が続いているが、保守の政治家をはじめとして地元にもあきれた無理解、偏見がいまだに充満している。水俣の現状は、人権に無理解なわが国の政治、そして地域のあり方の縮図のように思われて仕方がない。(SA)

住所・アドレス変更手続きのお願い

お引越し等で住所が変わられた際には、ライフストーリー研究所事務局まで、変更のご連絡をお願いいたします。

年会費の納入についてのお願い

研究所は皆さまの会費で運営をしております。2023年度会費の、お振込みをよろしくお願いいたします。

入退会のご案内

入退会のお申し込みは、以下までご連絡ください。

E-mail: info@lifestory.or.jp

（社）日本ライフストーリー研究所

〒408-0032 山梨県北杜市長坂町大井ケ森 1176-489

E-mail: info@lifestory.or.jp HP: http://lifestory.or.jp